

旧象潟のオニヤブソテツ

笹岡 昭平

I はじめに

当館では鳥海山麓を対象にした地域研究が各部門合同でなされ、その成果が地域展「鳥海山麓一山と人」(55年1月~6月)として公開された。

そのなかで文化元年(1804年)の地震以前の「旧象潟」が海につながる潟であったことは周知のことであるが、このことを貝化石の分析やかつての島々や潟岸に分布していただろうと推定される海岸性植物「オニヤブソテツ」(図1)の存在によって検証してみようとする試みがとりあげられた。このオニヤブソテツについては当初考えていた成果が得られなかったが、その経過と現存のオニヤブソテツについて簡単に記述してみたい。

なお、象潟地区の調査は県立船川水産高校教諭 堀井雄治郎氏のご協力に負うところが大きかったことに謝意を表する次第である。

II 調査にあたって

象潟地区と比較する目的で文化元年の地震でほとんど海岸線の変化がない地区(金浦、芹田~黒川)を簡単に調査した。ここでは海岸線からどの程度内陸に入



図1 オニヤブソテツ

りこんでいるかに重点をおいて調べてみた。

象潟地区では旧象潟の東潟岸および点在する「島」を重点的に調べた。それは現海岸線から比較的是なれた東潟岸にオニヤブソテツを見つけて、旧象潟に結びつけた考察を試みたいと考えたからである。

なお、調査は1979年10月から1980年11月まで断続的に行った。

III 調査結果の概要

図2、図3、表1にその概要を示した。現海岸付近や象潟の街中の石垣等にもオニヤブソテツは多数見受けられたが、図があまりにも繁雑になるので省略し、旧象潟の結果を中心にした。

IV 考察

芹田~黒川地区、金浦地区では現海岸線から700~900mほどの内陸までオニヤブソテツが入り込んでいた。神社やお寺などの人手が加わったのではないかとと思われる地点を除くと、海岸から300~500mの範囲とみられる。ただし、データが少ないので断定はできないだろうから一応のめやすである。

象潟地区でこれよりも内陸にオニヤブソテツがあれば、その昔、その地点は潟に面していたと言えそうである。図3、表1の地点7「上たらの木森」は1,100mの内陸にあり前の2地区に比べて特異である。同じように東潟岸に数箇所の存在地点があれば有力な手がかりが得られるのだが残念ながらここだけしか発見できなかった。しかも1株だけである。また、前2地区の地点3「お寺」(900m)、地点6「神社」(700m)のオニヤブソテツは植栽されたものではなく、環境条件が合って自生したとも考えられるので、上たらの木森の1,100mは確かに大きな値ではあるが、絶対的とは言えない。

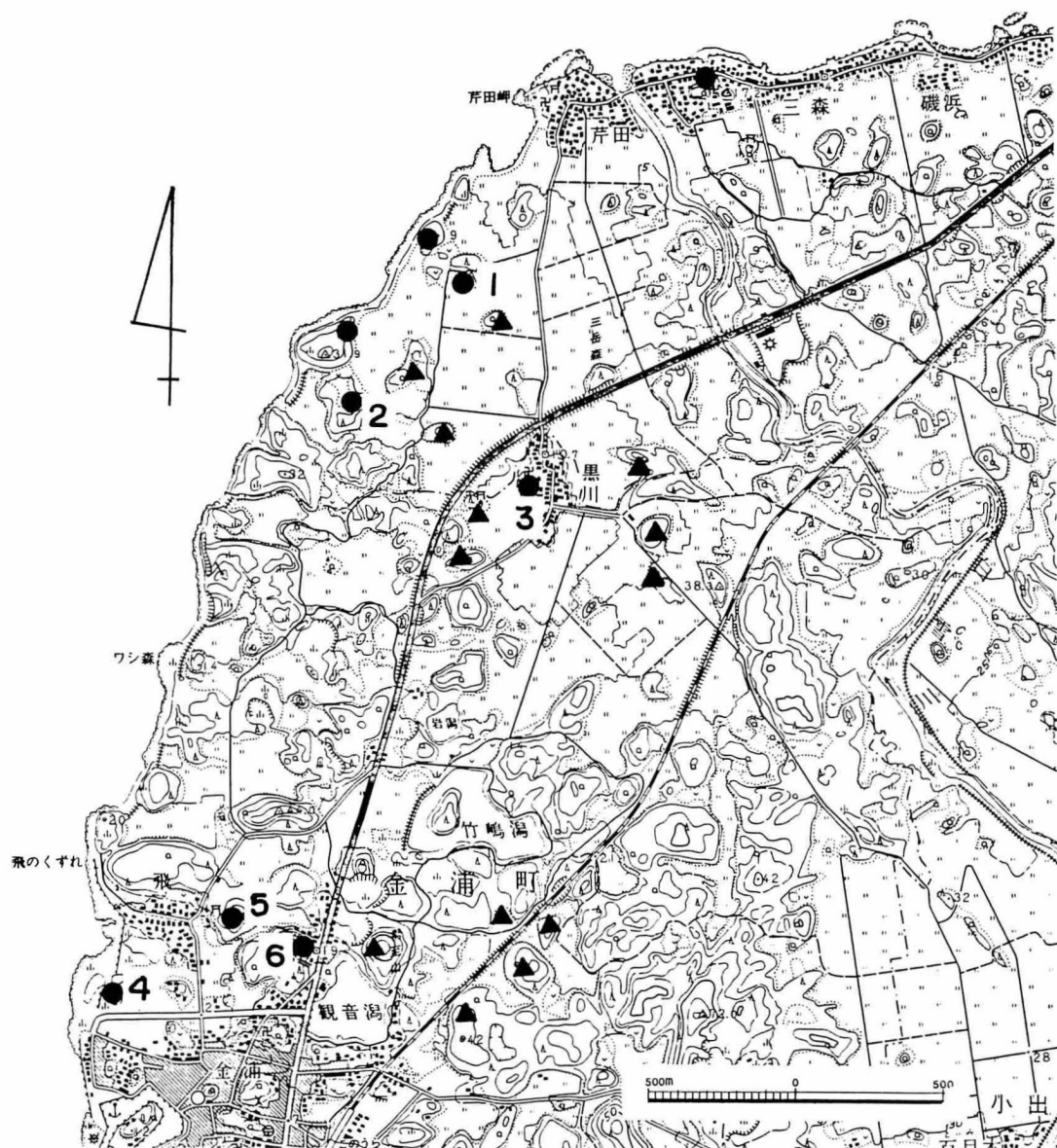


図2 金浦、芹田地区のオニヤブソテツ

- オニヤブソテツの生育している地点
- ▲ 調査したがオニヤブソテツのなかった地点
- ※ 国土地理院発行2.5万分の1地形図「平沢」を使用

旧象潟のオニヤブソテツ

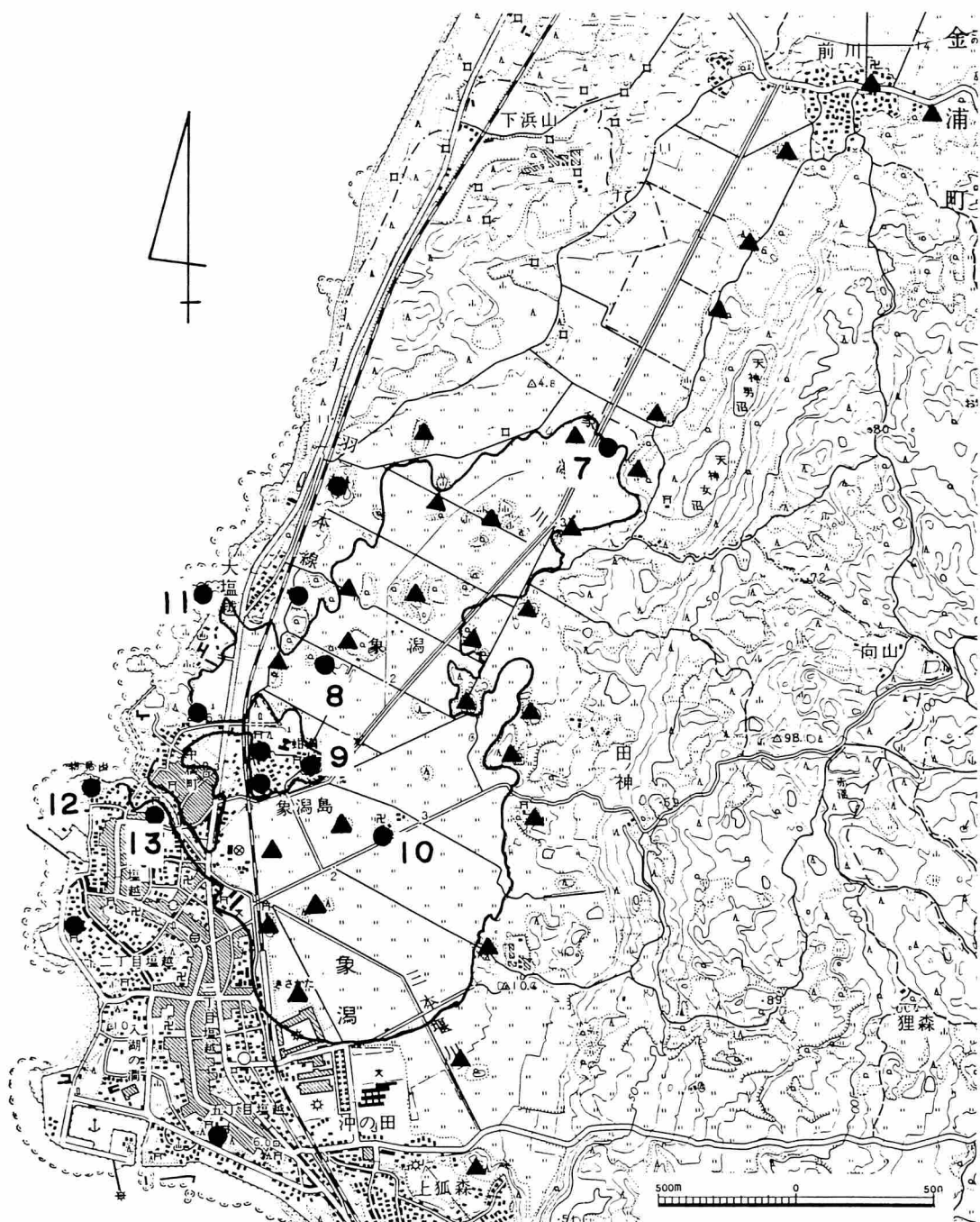


図3 象潟地区のオニヤブソテツ

- オニヤブソテツの生育している地点
- ▲ 調査したがオニヤブソテツのなかった地点
- 旧潟岸線
- ※ 国土地理院2.5万分の1地形図「象潟」を使用

表1 オニヤブソテツの生育するおもな地点

地区	地点番号	現海岸線からの最短距離(m)	備考
芹田 }	1.	約 250	わい小
	2.	〃 250	〃
	黒川 3. 黒川 (寺院)	〃 900	境内
金浦	4.	〃 160	神社付近 境内
	5. 飛	〃 450	
	6. 金浦山神社	〃 700	
象潟	7. 上たらの木森	〃 1,100	1株のみ
	8. 弁天島	〃 600	成育良好
	9. 蚶満寺付近	〃 600	〃
	10. 高泉寺	〃 1,000	境内

なぜ付近の島にはなく、孤立した地点7に1株のオニヤブソテツがあるのだろうか。他の島は人手が加わり、かつ長い間に植生の移り変わりなどがあってオニ

ヤブソテツが衰退し、地点7はその一步手前であると考へたいが、今後の盛衰を見ないと結論は出ない。

オニヤブソテツは島や崖の東～北斜面のやぶに多く生育しているように見られる。例外は地点13熊野神社と蚶満寺(ハツ島)付近である。ここはタブ、ケヤキ、シナノキ、クロマツ、エゾイタヤ、ヤブツバキ等の林でその林床にオニヤブソテツが生育している。日照を避けて東～北斜面や林床下に繁茂するのか、季節風の影響なのかは不明である。

V おわりに

旧象潟は陸化してから170余年になるので、島や海岸の状態は当時から見ればかなり変遷しているのではないだろうか。現在の生育地点が今後どのように変化するかによって何らかの結論が出てくるものと思われる。このたびはそのスタートと考へ、簡単に報告した。